

第 47 回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー

「新たな地域主義の構想に向けて」

基調講演

「石牟礼道子の世界と地域の未来～生命たちの脈わいを感じ取れるか？～」

法政大学名誉教授 田中優子氏

2022 年 12 月 17 日（土）

本日は「都市政策セミナー」です。政策の話をする立場にはないのですが、石牟礼道子の話を、と提案してくださったので、それなら話してみようかと思いました。

私は専門が江戸時代なので、江戸時代の地域の自治などについては大変関心がありますし、むしろ政策ということでは、江戸時代の自治のありようはこれからの日本につながるのかもしれないです。しかし今日は石牟礼道子の話ですので、自治ではなく石牟礼文学の方向から地域に踏み込んでみようと思います。地域はかつて、何によって成り立っていたのかを、あらためて考えてみようと思います。

1930年代の水俣・その町と周辺

石牟礼道子の作品に『椿の海の記』があります。これは石牟礼道子が3歳から、小学校に入った8、9歳ごろまで過ごした「場所」について書いた作品です。1930年から35年ごろになります。水俣市の栄町という中心地と、その外れにある水俣川の河口の「荒神」というところ、通称「とんとん村」と呼ばれていたへき地ですが、この両方について、記憶を辿って非常に詳細に11章にわたって書いた作品です。

まず地理的に辿ってみます。町と村が江戸時代と同様の構成です。町があり、それを囲む村があります。村というのは生産地で、生産地と町、あるいは都市というのは決して無縁ではなかった。それぞれ違う生活をしているわけではなく、周辺の農村で生産するものが都市に運ばれ、また都市の中の、例えば排泄物だとかゴミだとかは肥料になって地域に運ばれるという循環が江戸時代から行われています。そういう中でコミュニティというのは成り立っていくのですが、農村におけるコミュニティ、町の中のコミュニティというのも非常によく似たコミュニティの構成をしています。

ところが、そこに大企業「チッソ」がやってくるわけですね。これは江戸時代には起こらなかった事柄です。日本を代表するだけでなく、チッソ株式会社は戦争中に朝鮮半島にまで進出して、アジアでも大規模な展開をした大企業です。そういう大企業に勤める人たちはエリートたちです。その人たちが暮らす地域、住まい、その人たちの子どもたちが通う学校が町の中にできてきます。そうすると、空気が一変するわけですね。このことは水俣だけではなくて、福島も同じでした。福島の場合には1960年代に原子力発電所がつくられるのですが、そのときにはアメリカの企業、ゼネラル・エレクトリックがやってきて、これをつくっていく。ですから、工事期間中は一帯がほぼアメリカになってしまう。そういう現象が起こるわけです。どちらにしても、そのように企業城下町になっていくこ

とは、日本の近代化とは何だったのか、をよく表しています。その近代化の中で暮らした人たちがどういう思いをもったのかということも、よく分かるケースなのです。

水俣の場合にはよく分かるどころではなく、それによって何十年もの間続く被害を受けた。福島についてはどのくらい被害が続くのか、いつ完全な復興ができるのか、いまだに分かりません。福島と水俣の違いがあります。福島は原子力発電所の事故が終わった後で、多くの方たちが他の土地に移住したということです。水俣にそれはなかった。漁師の方たちは、そのままそこに住まわれて漁師を続けようとした。なかなかそうはならなかったけれども、その方々は現在でも水俣に住んでいます。胎児性水俣病患者は、ほぼ私と同じ世代です。施設に入っている方もおられ、あるいは短命ですのでもうずいぶんとくさんの方が亡くなっていらっしゃる。しかし水俣にとどまりました。

こういうことを私たちは一つの事件や事故として客観的に捉えるだけではなく、そこに暮らした人たちがその生活をどう表現したのか、注意をはらうべきです。水俣の場合には、石牟礼道子が非常に詳細に書いてくれた。ですから、私たちはその言葉に向き合わなければならぬと思っています。

藤原書店から『石牟礼道子全集・不知火』全 17 巻が出ています。2 巻と 3 巻の『苦海浄土』は皆さん、よくご存じだと思います。『苦海浄土』の第一部が 1969 年に刊行されて、多くの方たちが知るようになりました。実は、私が石牟礼道子を読むようになったきっかけは、この第一部の『苦海浄土』が出された 69 年の次の年、1970 年に法政大学に入学したことだったのです。その年に益田勝実という古代文学の先生の授業で、『苦海浄土』が朗読されました。古代文学の先生なのですが民俗学者でもありました。ですから、日本の一地域で何が起きているのか、よほど関心をもたれていたのだと思います。1 年生に向かって、『苦海浄土』の第一部のくだりを朗読なさったんです。朗読するとはどういうことか。つまり私は文字で見たのではなくて、音で聞いたわけです。文学の中で方言を音で聞くのは私にとっては初めての経験でした。実際に読んでみると、それだけではなく医学データもしっかりと書かれている著書でした。世の中にこんな文学があったのかという、非常に大きな衝撃でした。そして文学観が変わってしまった。法政大学で初めて、私はそれに気づくのですが、それから水俣あるいは石牟礼道子という人に関心をもつようになりました。その第一部のかなり後に第二部、第三部が書かれています。1970 年に大阪厚生年金会館でチッソの株主総会が開かれました。第二部は、そこに患者さんたちと一緒にやった、その顛末を書いた作品です。

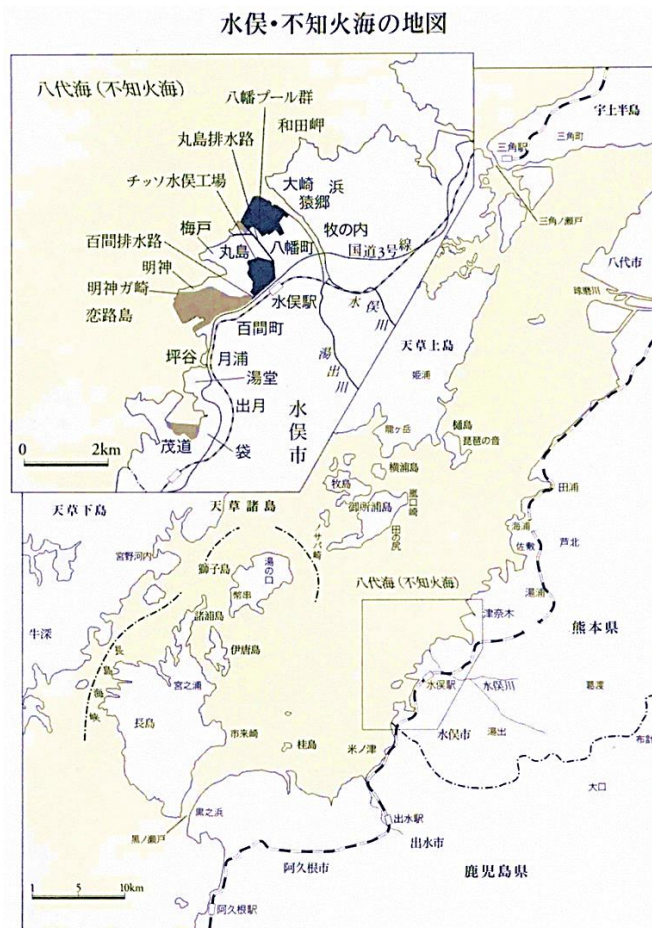
これはニュース映像にも残っています。舞台の上にチッソの社長、その他の幹部の方たちが並んでいるところに、白い巡礼の衣装を着て、笠をかぶった患者さんたちが次々に舞台に上がって行って、社長を取り囲むのです。当時は江頭社長です。雅子皇后の祖父にあたる方でした。このことをきっかけにして、江頭社長は辞任して会長になる。次の年に今度は丸の内のチッソ本社に籠城することになります。これが第三部です。

第二部も第三部も非常に面白いんです。とてもユーモラスで生活感にあふれているんです。この第二部、第三部を通して、石牟礼道子は『苦海浄土』だけではなく、全く別のことを考えるようになっていきます。何かというと、第三部の籠城のときに、島原・天草一揆のことを思い出すのです。そして後に『春の城』という作品に、それが結実します。もう一つは、世阿弥の『風姿花伝』をそのときに読んでいます。それが後の能に、また結実します。このように 1969 年、70 年、71 年が石牟礼道子にとって非常に重要な時期で、これが第 2 巻、第 3 巻にあたるのですが、その基底にあったのが、第 4 巻の『椿の海の記』です。これを読むと、ああ、この人が水俣病に向き合うようになったのは、この幼児体験があったのだなということが分かります。これはコミュニティの体験であると同時に、自然の体験、自然界と向き合うという体験です。これが身体と精神の基本のところにしつかりと据えられていて、そこから見たときにチッソの問題というのはとんでもない問題なのだと気が付いていくわけです。

第 5 巻、第 6 巻、そして 7 巻、8 巻もかなりたくさんのお書きになっている。例えば 10 巻では、「食べごしらえ」という言葉をよく使っています。石牟礼道子は「料理」という言葉を使わないのです。「食べごしらえ」と言う。自然界から人間はものをもらって、食べ物にして生きています。衣食住、全てそうです。「食べごしらえ」というのは、自然界のものそのままでは人間は食べられないので、食べられるようにこしらえることなんです。「料理」ではなくて「食べごしらえ」と言った途端に、自然界の素材全体が浮かび上がってくる。そういう言葉の使い方をします。第 12 巻の『天湖』は、ダムのある村が全部沈んでしまった、その後の話です。第 13 巻は先ほど言った島原・天草一揆のことを書いた『春の城』です。それから非常にたくさんの詩歌・俳句を作っていて、能も作っています。それが第 15,16 巻に収められています。そういう方ですから、全 17 巻プラス別巻という、多くの作品が残りました。

『椿の海の記』は 1976 年に刊行されています。第 1 章から第 11 章まであります。非常に長いので、今日はとても全部ご紹介することができないのですが、『椿の海の記』の

時代とはどんな時代だったのか、まずお話しします。1927年のなんと3月11日に、石牟礼道子は天草で生まれ、すぐに水俣に移住しています。その後水俣で育つのです。

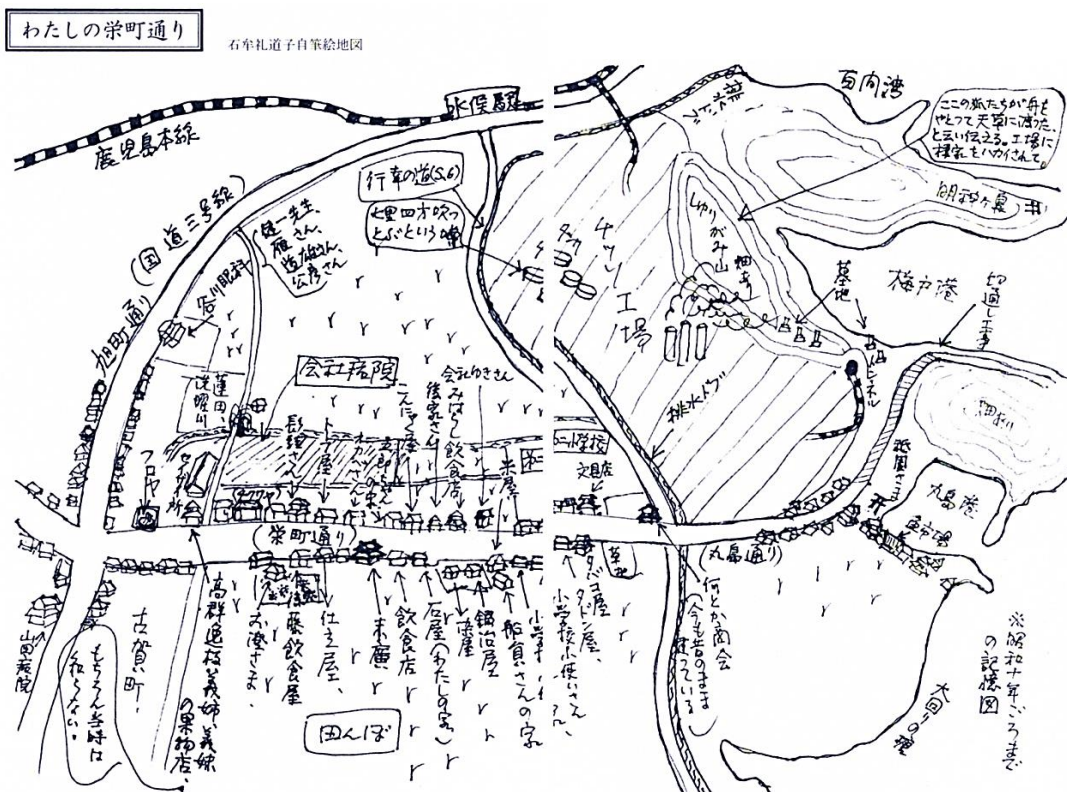


『石牟礼道子全集・不知火』別巻1より

栄町というところにいました。栄町にある小学校に入学しました。ところが8歳の時に祖父が事業に失敗して、栄町の自宅が差し押さえられるのです。それで水俣川河口の荒神、通称「とんとん村」と言われているところに引っ越します。そして、祖父が妻妾同居します。道子は母方のおばあさんと一緒に暮らしているのですが、それとは違う人が来る。ですから妻妾同居になる。小学校も転校する。このときに、既にチッソは水俣にあります。1908年にチッソができています。

栄町がどんなところだったか、石牟礼道子が自分で地図を書いています（「わたしの栄町通り」）。栄町のまさに中心のところに、最初は暮らしている。右上のところにチッソの工場があることが分かります。その隣に「しゅりがみ山」という山が書いてありますね。「ここの狐たちが舟をやとって天草に渡った」と書いてある。狐たちが天草に渡っ

たという話があった。チッソがあるけれどもそこに裏山があって、裏山には物語があった。それはチッソができる前からの物語です。町があって、周辺の村があって、里山があって、さらに奥の方に奥山があるはずです。そういう構成の中で人は暮らしている。里山というのは、生活にとっては大変重要な山なのですが、そこには動物もたくさん暮らしています。そして、子どもたちはそういうところに年中出入りするわけですね。海にも面していますから、海と山と両方に、町で暮らしている子どもたちも出入りをしています。これは非常に詳細に書いてあって、どこに誰が住んでいたか、全て覚えているんですね。



『石牟礼道子全集・不知火』別巻1 より

『苦海浄土』第2部、チッソの株主総会の終了後のところにこう書いてあります。

会社の裏山はもと「しゅり神山」という立派な名を持っていて、そこは狐たちの持ち山であった……

前面に不知火海が、その沖は天草の島々、右手には梅戸の二子島、左手には明神が岬（はな）を連ねていた。天草島には眷属たちも棲んでいるので、チッソが来てこの山をうち崩した時、大方の狐たちは伝（つて）を求めて渡海した。……

「今は持ち合わせがござりませんが、向こうの島に渡してもらってから、必ず都合をつけて、渡し賃はお返しいたします」と申し出たのも少なからずいたという。……そういう時は人間も畜生もな、変わりません。哀れでなあ、……。

「チッソの人方もて、魂の高かお人なら、しゅり神山のおしゅらさまのことは、お解りになりそうなものでございますよねえ。位の高か狐ですがねえ」

（『苦海浄土』第二部・第六章「実る子」）

「天草島には眷属たちも棲んでいるので」というこの「眷属」とは、狐たちの仲間のことです。「渡し賃はお返しいたします」と言ったのは、狐が言った、という意味です。こういう会話が、町の中で取り交わされていたのです。狐と人間との間に区別がありませんね。狐は当然しゃべれると思っている。別にそれはおかしくも何ともないわけです。

「位が高い狐」という言い方と同時に、「魂が高かお人」という言葉があります。これは『苦海浄土』の中にもたびたび出てくるのです。石牟礼道子だけではなく患者さんたちも含めて、チッソという大企業には社長さんという偉い人がいる。偉い人は魂も高いはずだ。だから、自分たちの苦しみ分かるはずだ。だから話をさせてくれというわけですね。魂が高いのだから、自分たちの気持ちが分かり、謝るはずだと思っているのですが、実際には謝らないし、話もさせてもらえないんです。

「魂が高い」ということと、「偉い」ということは同じことだという感覚が、かつてはあった。けれども近代の大企業におけるエリートたちの魂は少しも高くなかった、ということがだんだん分かってくる。患者さんたちも、近代社会において「偉い」とは何かを、次第に学ぶわけです。今、私たちは政治家の「偉い人」たちを見ているから、魂が高いどころか、「偉い人」とは魂が低い人だと、残念ながらわかってしまっていますが。

『椿の海の記』の中にこういうくだりがあります。

先隣の女郎屋「末広」、隣りは衣笠まんじゅうを置いて、焼酎も吞ませる「万十屋」、筋むかいの「渡辺飲店」……

酒屋、女郎屋、お湯屋、紙屋、万十屋、米屋、野菜屋、豆腐屋、アンコ屋、竹輪屋、石塔屋、こんにゃく屋、タドン屋、と商いの名をそのまま屋号にして、髪結いさん……

その間の空地に「会社ゆきさんの家」、がぼつぽつと建った。わたしの家から下手

には、染屋、鍛冶屋、米屋、船員さんの家、学校の小使いさん、タドン屋、花屋、煙草屋、学校の道具屋、第二小学校と続き、その先の田んぼと溝をへだてて、ひとときわ広大な日本窒素株式会社があるのだった。

（『椿の海の記』第三章「往還道」）

この中の「会社ゆきさん」が、チッソに勤めている人のことです。「その先の田んぼと溝をへだてて」とあるように、やはり町の周辺に田んぼがある。当然、畑もあります。それから山がある。そういう構成になっていて、典型的な日本の町と農村の関係です。では漁師さんたちはどこにいたのかというと、栄町にはいません。むしろチッソとは逆の方向のところに漁師さんたちが住んでいるのです。その人たちが栄町に魚を売りに来るんです。

魚を売りに来る女たちの女籠（めご）は、ことにつくりが大きく深く丈夫に出来ていて、八代女籠と云った。……

魚売女房は、体力と気っぷと計算にたけて、商い上手でなければならず、そのような女たちは、丸島とか梅戸とか明神、月ノ浦、出月、湯堂、茂道の漁港漁村で育ったのである。夜が明けかけると、丸島港と梅戸港につなげて祖父たちが造った栄町の道路の上を、八代女籠を担いだ女房たちが調子をつけて、ぎっし、ぎっしと揺りながら通ってゆく。たたらを踏んで踊りあがってゆくような足つきであった。女籠を揺る調子の合間に、張りのある声で呼ぶ。「魚はいらんかなあっ」…栄町はそのような彼女たちの気塊によって夜が明けるようなものだった。この女房たちの二代目、三代目がことごとく、後年水俣病になってゆくのである。

（『椿の海の記』第三章「往還道」）

道子のおじいさんとお父さんは石工として道をつくっていたので、栄町の道は、彼らが作った道路なのですね。その道で魚を売って歩く女性たちが水俣病になっていく。そしてこの人たちのおなかから生まれた子どもが胎児性水俣病として生まれてくるのです。胎児性の場合には胎児が全部吸ってしまいますので、本人は水俣病にならないケースがあります。先ほど言いましたように、胎児性水俣病の人たちは 1952 年、53 年、54 年ぐらいに生まれています。私は 1952 年生まれですので、同世代です。生まれた場所が違っただけのことで、自分はこういう時代に育ったのだ、と私は考えるようになりました。

湿田地帯の中を突っ切って出来たあたらしい一本道の栄町道路の両側には、女郎屋の末広が建つと、その弟の店の、焼酎といなりずしとうどんと、焼酎の肴に竹輪や酢ダコなどを出す文字どおりの飲食店が出来、その隣りに酒屋が出来、酒屋の前に髪結いさんが来て、末広の妓たちの髪を一手にひき受けた。……

「みっちやん、そら汚なかけん、まちっと美しかっぱあげまっしゅ。こっちおいでなはりまっせ」妓たちの髪結い時や化粧どきには、そういうわけでなんとなく末広か、髪結いさんにあがりこむ。……

町のものたちから後指をさされているこのような妓たちは、天性ほとんど優しくかった。『椿の海の記』第三章「往還道」)

道子は、この髪結いさんのところにしょっちゅう上がり込むようになるのです。そこには、女郎屋の女たち、つまり娼婦たちがいたのです。その人たちを道子は「天性ほとんど優しくかった」と書いています。子どものころに、そういう人たちと友達のように接するという経験をもっていた。後の時代になると、親がそんなところへ行っちゃ駄目だと言う。町の中ではそういうことが起こる。そういうことがなければ、こういう世界は子どもにとってなじみのある世界となり、同じ人間として接することができる。つまり、差別観を持たずに大人になることができます。

そして、とんとん村です。「わたしの家は、水俣のいちばんさい果ての村の、そのまたはずれの墓場と避病院と火葬場の間の、舟納屋のような藁小屋に、栄町から移り住んだのである」(『椿の海の記』第二章「岩どの提燈」)。これが家を追い出されて、移り住んだ場所です。町のはずれには何があるのか。お墓があります。結核など、人と接することのできない病人たちが入っている病院があります。それから火葬場があります。死の世界がこの周りに広がっているのです。そういうところは家賃も安いでしょうし、つまり町の真ん中に暮らせなくなった人たちが行く場所でもあった。

そして隠亡がいます。死体を焼く人です。「火葬場の隠亡の岩殿は、日の昏れ方のお葬式のうしろからついて行って、夜中か夜明けに、水俣川の川口の千鳥州の、なよなよと夜も揺れている芒の土手道を、提燈とぼして行き来していた」「岩殿は、無人のとんとん村にやって来た最初の住人とかで、兄者の方は、犬猫の皮をはいで太鼓三味線を自分で張って」とある。岩殿の兄弟は被差別民だと分かります。

被差別の人たちはだいたい村のはずれか、あるいは大阪とか関東の場合には特定の地域に暮らしたのです。私は白土三平の劇画『カムイ伝』を使って社会学部で講義をしました。その講義をまとめた『カムイ伝講義』という本を刊行しています。『カムイ伝』で非常によく分かるのは、被差別民は職人だということです。ここに書いてあるように、太鼓を作り三味線を張るのです。近代になって屠殺が始まりますが、江戸時代は動物の肉を食べませんから屠殺業というのは存在しません。馬とか牛は田畑で使役していて、自然死をします。馬や牛が自然死すると、村の人たちがそのテリトリーを担当している被差別の人たちに声をかけて来てもらって、運んでもらいます。彼らはその後、できるだけ早く、つまり腐らないうちに皮を剥いで、なめして、川で洗ってきれいにし、太鼓だとか三味線をつくる。つまり職人なのです。

『椿の海の記』の舞台は 1930 年代ですから、もう江戸時代ではありませんけれども、やはりそういう職人たちが必要だったのです。どこでも太鼓が必要です。三味線も必要でした。必要だから、村のはずれにいる。それから、この時代はまだ土葬の時代です。地方にもよりますが、1930 年代の水俣は土葬でした。だから、なぜ火葬場があって火葬する人がいるのか、書いてあります。「火葬場に来る死人さん」は、ゆきだおれだったり、よそから来ていてまだ墓地がなく檀家が決まっていなかったりする。そういう人なのです。無縁仏に近い人たちだった。そういう人たちが、土葬する場所がなく、火葬にされるわけです。そのために火葬する役割が必要だったということが、よく分かります。「磯風の吹きさらす中で焼き払われたり」するのです。非常に「哀れにさびしく見えていたから、大崎（うざき）ヶ鼻の火葬場といえ、町の人びとが忌むのも仕方なかった」と書いています。（『椿の海の記』第二章「岩どの提燈」）

それから、岩殿たちが住んでいるさらに奥です。

猿郷の丘の奥の迫（さこ）にもうひとつの部落がある。その部落からいちばんひきあがったところに、屋根の藁はほどけ、ほどけたところから竹の垂木が露出して来て、壁も破れはてた家が一軒あって、そこには、鼻が欠け、両掌の指も欠け落ちてしまった癩者の、徳松殿（どん）の一家が住んでいた。

とあります。癩病の患者さんたちが住んでいたのです。すでに病院に入っていた時代だけでも、そうでない人たちもまだまだいるわけですね。隠亡さんとか被差別民が住ん

でいる、そのさらに向こうに、差別された癪者たちが住んでいたことが分かります。非常に貧しい暮らしをしていた。奥さんと娘がいるのだけれども、めったに外に出ない。ときたま行き逢うと、木綿縞の衿元をかきあわせるようにして、丁寧におじぎをしていく。そして、やがていなくなった。「噂では、県の衛生課の役人たちが晩のうちに連れに来て、熊本の本妙寺に連れて行ってしまったというのであった」。おそらく病院に連れて行ったのだと思うのですが、この熊本の本妙寺というところが伝説の場所になっているのです。ここに癪者の人たちが集結しているという物語があったのです。だからそういう噂が広まっていたと書いています。（『椿の海の記』第二章「岩どの提燈」）

こんなふうにして、『椿の海の記』が書かれている。今、文章を読んでいただきながら、栄町を中心にした空間配置を知っていただいたわけですが、さらに何が書かれているか、今度はその「自然世界」ご案内したいと思います。

『椿の海の記』の自然世界

『椿の海の記』の冒頭には、石牟礼道子の詩集の中に収められている詩の一部が切り取られて、書かれています。「ときじくの かぐの木の実の花の香り立つ わがふるさとの 春と夏とのあいだに もうひとつの季節がある」。「死民たちの春」という詩の一部です。「死民」という字に注目していただきたいと思います。まず「ときじくの」という枕詞ですけれども、これは『日本書紀』から使われている古語で、めったに使わない枕詞です。「かぐの木の実」というのは柑橘類の原種的な、大陸から渡ってきたばかりの柑橘類のことを言うのですが、つまりミカンです。そういう古代の言葉を使っている。

それから春夏秋冬の四季ではなくて、「春と夏とのあいだに もうひとつの季節がある」という言い方をしている。この辺のニュアンスを感じとっていただきたいと思うのですが、つまり石牟礼道子は近代を書いているんだけど、その頭の中で古代とか近世とか現代を行き来しているんですね。ですから能の世界も、能についてほとんどご自身が見たことがないらしいのですが、書けるのです。古語をしょっちゅう詩の中でお使いになる。それだけでなく、この世から見えない「あいだ」を書きます。春と夏の間に、隠されている別の季節が、かすかに見えるのです。

「死民たちの春」については、詩とは別に「わが死民」という文章があるので、この意味を受け取っていただきたいのです。私たちの言う「市民」と「死民」の違いを書いています。

「市民といえば景色のいろが急にうらぶれる。

未来永劫の世界であれば、＜村＞のなかの＜群＞のまぼろしが生き死にしているところであらねばならぬ。木の間隠れに、まぼろし世界と通じあっていないければ、ここでは延命できないのだ。」

「死民とは、市民という概念の対語ではない。

いや、市民、といえば、まぎれもなく近代主義時代に入ってから概念だから、わが実存の中の先住民たちは、たちまちその質を変えられてしまうのである。まして水俣病の中でいえば＜市民＞はわたくしの占有領域の中には存在しない」。

「死民とは生きていようと死んでいようと、わが愛怨のまわりにたちあられる水俣病結縁のものたちである。ゆえにこのものたちとのえにしは、一蓮托生にして絶ちがたい」。(全集第三巻より)

ここで、石牟礼道子は共同体というものをどう捉えていたかが分かります。『春の城』の中にも出てくるのですが、共に死を目前にして、死と向き合っている。そこに共同体というものがあらわれてくるのです。何となく一緒に暮らしている共同体というものと、全く違う感覚を共同体の中にもっています。それが死という概念の中で考えられているのです。その「死民」を詠んだ「ときじく」の詩から始まって、「岬」という『椿の海の記』の第一章が始まります。一部だけご紹介します。まず冒頭です。

春の花々があらかた散り敷いてしまうと、大地の深い匂いがむせてくる。海の香りとそれはせめぎあい、不知火海沿岸は朝あけの靄が立つ。朝陽が、そのような靄をこうこうと染めあげながらのぼり出すと、光の奥からやさしい海があらわれる。

大崎ヶ鼻（うざきがはな）という岬の磯にむかってわたしは降りていた。やまももの本の根元や、高い歯朶（しだ）の間から、よく肥えたわらびが伸びている。クサギ菜の芽や、タラの芽が光っている。ゆけどもゆけどもやわらかい紅色の、萌え出たばかりの樟（くす）の林の芳香が、朝のかげろうをつくり出す。

（『椿の海の記』第一章「岬」）

私はうまく朗読できないのですが、井上弘久さんという方が『椿の海の記』1章から11章を全て朗読しています。朗読というと今私がやってみたいに文字を見ながら読むのですが、それとは違って、演じているのです。全部覚えていて、その場で演じる。道子を演じるわけですね。一人称は道子になりますが、お父さんとの会話とか、おばあさんとのやりとりも出てくるのですが、それを演じ分けていらっしゃいます。すごいです。つまり今読んだようなこの場所が、聞いただけで浮かび上がってくる。やはり石牟礼道子の文章は、耳から聞くことにとっても大事な点があるのだと、井上弘久さんの演劇であらためて感じます。海に行く場面もよくあります。

潮のしぶきがかかりそうな岩の上まで降りると、磯椿はまだ咲きのこっている。鳥は椿に来ていて、目白たちが多かった。ここらの椿は、もう真冬から咲きはじめ、そのような岩盤の層をめぐらせている岬という岬をつないで、山つつじの開花までの時期を咲き連なりながら、海の縁を点綴（てんてい）する。そのような岬の影が、朝の海にさしていた。

「やまものの木に登るときゃ、山の神さんに、いただき申しやすちゅうて、ことわって登ろうぞ」父の声がずうっと耳についてくる。（『椿の海の記』第一章「岬」）

繰り返し、お父さんの言葉としても、おばあさんの言葉としても出てくるのが、山の植物は自分のものではない、山の神さまのもの、山のものなのだから、何かを採るときには「いただき申す」と言ってもらわなくてはいけないよ、という教えです。

おばあさんがそれを言うときには、山に住んでいる「あのひとたち」のものだからと言うのです。「あのひとたち」というのは、動物たちのことです。先ほどのキツネとか、タヌキとかウサギとか、いろいろな動物がいるのですが、「あのひとたち」のものなんだから、もらいますよと言ってもらわなくてはいけないよ、と。

私はこういう言葉のやりとりから、江戸時代の人たちの自然観をあらためて学んだのです。なぜ彼らは採り過ぎないのか。つまり、とことん採って、売ってお金にするという発想が全然ないんですね。来年も豊かな実りがくるように、という説明を私はよくするのですが、それだけではないです。つまり、これは自分のものではない、ということです。実は人間のものではない。その自然の恵みをいただいて私たちは食べたり、使ったりしているのであって、そもそも自分のものではない。だから、まるで自分の権利のようにして採

るわけにはいかない。そのことを親子の会話の中で、こうして子どものころから教わっているんです。親子だけではありません。近隣のおばさんとかおばあさんとか、おじさんとか。そういう人たちとの会話にそれが出てきます。例えば、こういう事例です。

「井川ば粗末にするな。神さんのおんなはつとばい、ここにも」孫たちが散らかすつわ落の葉を、手拭いをかぶった婆さまたちがていねいに片付ける。

「川の神さんな、たしか、山にも登んなはつとじやもん」囲炉裏に、手のひらや膝をくべるようにして集ってきて、川祭の頃、年寄たちがよく話す。「やっぱり春の彼岸の頃じゃもん」。

「海からそれぞれの川の筋をのぼり、村々を区切って流れるちいさな滝川に至りながら、田んぼの畦などを、ひゅんひゅんという声で鳴きながら山にむかっておいでになる」。(『椿の海の記』第一章「岬」)

そのことを繰り返し毎年のように聞いている道子は、一体いつになったら自分はこのひゅんひゅんという音を聞くことができるようになるんだろうと思って、おばさんたちに聞くんです。「そのうちなと」言われるんですね。

では、その神さんたちってどんなふうなの、大きい人なの、小さい人なのと聞くんですが、それは見てはならんと言うんです。見てはいけないし、聞こえてこない、道子には。だけど彼らは聞こえてくる。特にこの時期、春の川祭りのころはすごく騒がしく通り過ぎていくんだということを、囲炉裏で話しているんです。そういう話を常に聞いている。

そういうときの神さん、神さまというのは宗教団体の神さまではない。つまり川そのものの、海であり、風であり、季節の風、季節の変化、そういうものが耳に聞こえ、また五感で捉えられるということを言っているのであって、それはほとんど『古事記』の世界です。アニミズムの世界です。でもそれがごく当たり前のことで、これは木の実が人間のものではないという感覚と、もちろん繋がっているわけです。

「山に成るものは、山のあのひとたちのもんじゃけん、もらいにいたても、慾々（よくよく）とこさぎ取ってはならん」。慾々というのは、欲を張ってということですね。全部取ったりしてはいけない。「カラス女（じょ）の、兎女の、狐女のちゅうひとたちのもんじゃけん、ひかえて、もろうて来（け）」というのをおもかさまが言う。おもかさまというのは、母方のおばあさんのことです。

道子も「あのひとたち」になってしまう瞬間がある。

霧雨が豪雨に変れば、岬の中腹のけもの道は、たちまちいさな細い流れになって走り下る。その流れを半分泳ぎながらすべり下り、磯の上に出て、渚伝いに帰れば迷うということはなかった。狸の仔のような本能で、山茨や茱萸（ぐみ）の樹の棘のしげみに出没していた。あけびの実を齧（かじ）って食べる「あのひとたち」の仔（こ）のような鼻つきになるのが自分でわかった。

山の稜線や空のいろが虚空のはてに流れ出したり、そびえ立つ樹々の肌が、岩より硬く大きく割れだしてみえる日に、そのような世界の間を吹き抜けてゆく風の音が、稚い情緒を、いっきょに、人生的予感の中に立ちつくさせることがある。

（『椿の海の記』第一章「岬」）

これは子どものときに何を感じたかを、道子が大人になってから表現しているのです。予感、生命観など、このときに自分は何をどう感じていたのかを、できる限り言葉にしています。それは、もちろん文章を書くようになってからの石牟礼道子が言葉にしたのです。

ということは、もしかしたら私たちにもできるのかもしれないね。記憶の中にあるあのとき、私は何を感じていたかと。そのときには言葉にできなかったけれど、それ自体は記憶に残っているんです。だから、それを後に言葉にすることができる。そのことは実はとても大事なことです。そういうことを全て忘れてしまうので平気で開発するようになるし、自分の中のその自然観を裏切るようになっていきます。ですから、言葉にしていくことの重要性というのはこういうところで感じます。「『あのひとたち』の仔（こ）のような鼻つきになるのが自分でわかった」と。つまり、自分も動物になってしまう、と言っています。これはいろいろなところに出てきて、『春の城』で江戸時代の人たちが籠城しているときに、自分たちはもう虫になりましたよね、と笑いながらお互いに話している場面がある。人間でなくなるということについて決して否定的には思っていない。とても自然にそう思い、面白がっている。

山の中腹の萩や葛の花の下にもぐり込んで横たわり、彼方を仰げば、花頂をはなれた全山の綿穂や花粉がいっせいに、きら、きらと光りながら霧のようにただよいのぼり、山々の姿が紗をかむったようにゆらめいているのを見ることがある。

山野が放つ香気のようなものが目に見えるのである。稚いものにはそのような山野の精気は過剰すぎ、ある種の悶絶にわたしはしばしばおちいつた。光りながら漂う花粉とともにわたしの感覚は山々をめぐり、それは早すぎる官能の告知ともいうべきで、空のはたてに離魂しているような酔いからようやくさめて、とんびにさらわれたような目つきになって帰るときを、たぶん、ものごころつく、というのででもあったろう。（『椿の海の記』第一章「岬」）

これもそうですね。先ほど言ったように、子どものころに感じたことを後で言葉にしているのですが、あのとき何かが分かった。つまり、あの時に「ものごころ」がついた、と認識したわけです。

おもかさまと「家」と「食べごしらえ」

決定的な影響を与えたと言われている母方の祖母「おもかさま」についても、たびたび書いています。

栄町の通りを、日に何回となく青竹を曳いて往ったり来たりする盲目の老狂女の、その竹の杖を、銭湯帰りの末広の妓（おんな）たちが、二、三人で曳いたり背中を撫でてやったりして、連れて帰って来てくれることがときどきあった。…むかえに出ているわたしに、曳いて来た青竹の先のおもかさまをひき渡すのである。

誰がみても、ひとめで正気人とはちがう神経殿（しんけいどん）だったから、道筋の家々ととも、戸口のそばにたたずまれ、不意に荒々と呪言めいたひとりごとなど云われたりしては仰天し、迷惑することこの上もなかったろう。……

おもかさまのそのような姿は、この界限に出没する異形のものであったにちがいない。雪の降る日も跣（はだし）のまんま、左の足は象皮病に罹って異様に肥大しひび割れている。着せても着せてもひき裂いて、あらわな肌が出る腰巻の、前も後もはだけほどけてしまうめくらの狂女と、道筋の昼間にはなじまれぬ昼風呂帰りの雛御前たちが、白い蓬髪と、黒い洗い髪を風になびかせ、一本の青竹につらなりながら道行をするさまは、人目をひくに充分だった。

（『椿の海の記』第五章「紐とき寒行」）

おもかさまは外に出て行ってしまうので、道子が追いかけていって、いつも連れて帰るんです。何を言っているのか分からないし、今で言えば認知症なのでしょう。それだけではなく、足もうまく使えないような状態になっていました。けれども、道子がこのおばあさんの面倒を見続けるんです。その親たち、父親と母親も大変おもかさまを大事にしています。おもかさまというのは母方の祖父の奥さんなんですが、祖父にはお妾さんがいて外に出てしまっていますので、帰ってこないんですね。

そういう家の中で、例えば食べ物のことなどもよく出てくるんです。「塩味だけで味付けしたよめ菜飯」だとか、「その春の海のくさぐさと、野の芽立ちぼくさぐさを集めた五目も六目もの雛の祭のときのちらしずし」とか、「あさりご飯をつくろうとおもえば、あさりを採りにゆく」とか、それから「山道のついでに、つわ蒨もわらびも山椒も採れた」とか、そら豆は「どこの畠でも作っていた」とか、「うるちと餅の両方の米をひき合せて」おだんごを作っていた、というような、食べ物についての描写がたびたび出てきます。

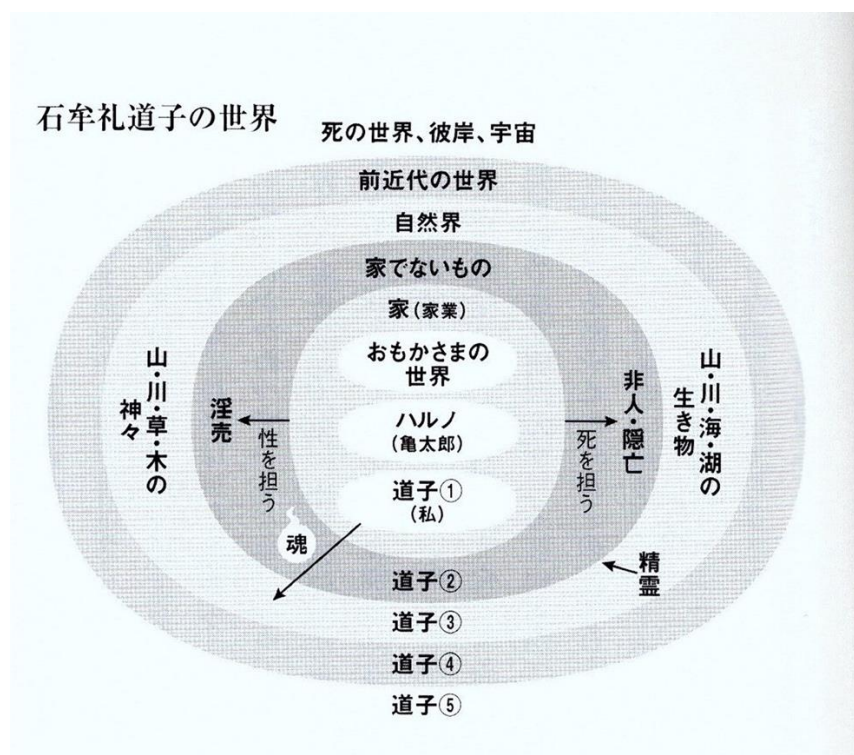
これが「食べごしらえ」です。「食べごしらえ」という題名の文章もあります。それは自分たちで摘んできた草や、近くで採れた穀物から作るおだんごやサツマイモや山芋。そういうものです。それから海で採れたもの。これも、自分で採ってきて調理する。お店に行っても当然あったはずですが、ほとんど出てこない。記憶に残らなかったんでしょう。むしろ山野とか海辺で何かを採ってきて、それを食べるということが人間としての食べ方だと、道子さんは考えています。この「食べごしらえ」ということは、食べ物にどう向き合うのかということです。食べ物とは、自然からもらうものが最もぜいたくなものだと思っている。

道子さんは、テレビで「グルメ」とか言って人がテレビカメラの前でものを食べている、あれは不思議ですね、というようなことを書いています。しかもレストランのメニューの金額を見ると、もう目が飛び出るほどの金額。実際に東京でそういうのを食べてみると、別段おいしくも何ともない。ああいうものって何なんでしょうね、と。ほとんどもう理解できない世界です。晩年まで、ずっとそうでした。

ですから食べ物はご自身でつくるか、お年を召されて食べ物を次第につくれなくなりましたが、そのときは渡辺京二さんがつくっていたんですね。渡辺京二さんは石牟礼道子を発見して、本を出すときには編集者としてついていた人で、歴史思想家でご自身もたくさんの賞をとっている評論家です。『逝きし世の面影』という名著があります。私も対談に

お邪魔したときに、台所に立っている渡辺京二さんを見えています。何人もの方が、石牟礼道子さんのところへ行くと、台所に渡辺京二さんがいるのをご覧になっている。そうやって食べ物というのはどこかから単に持ってくるということではなくて、食べ物とどうやって向き合うのかということがやはり生きることであり、道子さんにとっての生き方の一つだったのだと思います。

今お話ししてきたことを、私は著書『苦海・浄土・日本』の中でこんなふうに表現してみました。



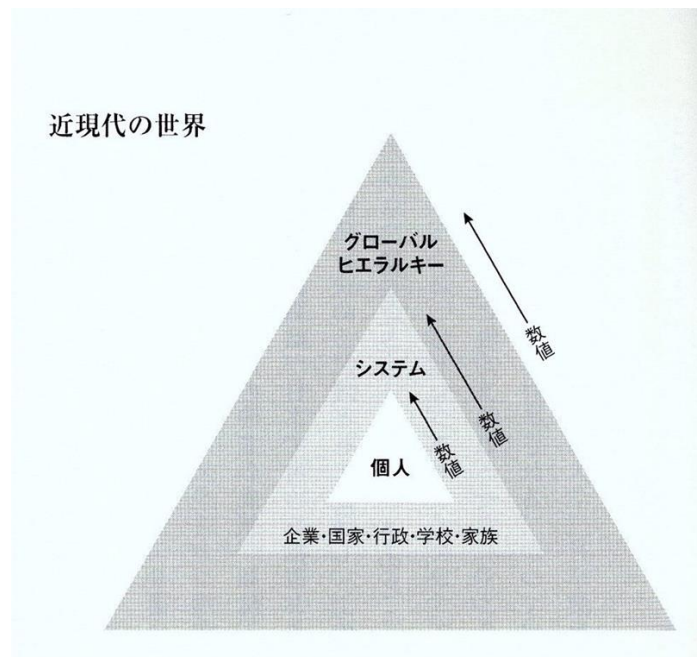
田中優子『苦海・浄土・日本』（集英社）より

道子がたくさんいます。まず幼いころの道子がいます。家の中を中心にして、幼いころの道子は、祖母のおもかさまがいて、お母さんのハルノさんがいて、お父さんの亀太郎さんがいます。石工が家業で、その家業の中には石工の職人さんたちもいます。ですから、家というものがしっかりあったことは確かです。だけれども、その家の中でみんなが幸せだったかという、おもかさんという人の不幸を間近で見ているんです。

そして家から一步出ると、淫売さんという言い方もします。「おんなたち」という言い方もしています。そういう人たちが町の中にはいつもいて、とても親しくしている。それから隠亡さん、岩殿もいて、やはり友達のようにしている。死を担う人、性を担う人たち

が町の外れや町の中にいて、道子はそういう世界をしっかり見えています。さらに、その向こう側に自然界がある。山や川や草や木、生き物、見たことはないし、音も聞こえないけれど、いるよと言われている神々がいる。その全体を覆っているのは、まさに前近代の世界観なのです。そして、さらにその向こうに死の世界、彼岸や宇宙がある。

実は、石牟礼道子さんは 24 歳ぐらいまでの間に、3 回ほど自殺未遂なさっているのです。特に嫌だったのは結婚です。結婚したお相手は教師でもあって、大変いい方だったそうですが、そういう問題ではなく、結婚という制度そのものがとても嫌だった。家というものがある、その家を中心にして人間の生活が成り立っていることを、道子は十分分かっているのです。分かっているけれども、共同体としておかしいと思っている。そのことが大事な観点です。



田中優子『苦海・浄土・日本』（集英社）より

道子は、数字に対して恐怖感を持っています。無限に続く数字の世界というものを考えて怖くなる、とたびたび書いているんですけども、実際にヒエラルキーとして私たちの近代社会をつくっている企業とか国家とか行政とか学校とか家族というのは、個人であったとしても、例えば家の中の個人であったとしても、その家の中の個人が学校でどのぐらいの成績をとるかとか、どんな学校へ行くかとか、収入がどのぐらいかとかという数字で判断される。個人の価値が数字で判断されるのです。組織もそうやって判断されます。

これがグローバルヒエラルキーの中におかれて、世界で何番目かと、そういう判断をされます。そういう近現代の数字で表現される世界観とか位置付けに対して、道子は非常に敏感に反応します。敏感にというのは、それは本当に人間が生きる世界なのか、と疑問に思う意味での敏感さです。そういう数字による近現代の世界と、先ほどのような道子さんの世界は、全く違うものとして立ち現れています。

共同体とは何か

共同体とは何かということが、石牟礼道子の作品世界に、とても大事な要素としてあります。「家族共同体」についても、たびたびいろいろなところで書いているのですが、『あそこの嫁御は女のくせ、朝っぱらから新聞広げて読みよらす。よっぽど暇人ばい』新しく来た嫁たちは、そういう村の気風に試されるのが常だった」と書いています。『おなごは三界に家ない』と父親の亀太郎に繰り返し脅され「代用教員を退職し、二〇歳そこそこで父の決めた相手の家に嫁に出され」「夫の実家の石牟礼家に『嫁じょ見習い』として半月ほど入った」というのです。あけの明星が出る頃水汲みに行く。その数、往復20回です。そして新婚四ヶ月で、3回目の自殺未遂を図ります。

これは、つらいというのだけではないんです。つまり家族共同体というのは、道子にとっては本当の共同体ではないのです。役割しかない。つまり先ほどの数字と同じように、数字と共に役割があります。嫁はこうするものだ、男はこういうふうに生きるものと、役割の中に押し込められるわけです。これは本当に「共同体なのか？」という疑問を持ち続けるのです。では道子は、どういう共同体観をもっていたか。

「だまって存在しあっていることにくらべれば、言葉というものは、なんと不完全で、不自由な約束ごとだったろう。それは、心の中にむらがりおこって流れ去る想念にくらべれば、符牒にすらならなかった」「この世は生命あるものたちで成り立っている。この生命たちは有形にも無形にも、すべてつながりあって存在していた」。『椿の海の記』第九章「出水」では、言葉を越えた「つながり」をそう表現しています。そして、私との対談の中で、「共同体というのは、万物が呼吸しあっている世界だと思ってきました」とおっしゃった。つまり生命というのは有形であっても無形であっても、すべてつながりあって存在して、それが共同体だと。だから万物が呼吸しあい、どの存在ものびのびと呼吸しているのであって、その中の何かが役割を与えられて、その役割だけやりなさいと言われていくわけではないんですね。近代における家族共同体というのはそうやって役割を与えられ

て、その中で生きるしかない。

江戸時代の家族共同体の中での武家社会はそういう社会でした。しかし農家などはそんなことは言ってられません。人口の 80%を占める江戸時代社会の農業者たちというのは、むしろ役割が決まっていない。あったらやっていたらなかったのです。常に誰でもが自然と向き合っていなければならないですから、それが優先されるのです。

けれども近代社会になって、石牟礼家は夫が教師です。そうやって外に出て働いている男たちが出てくるわけです。女性たちも明治になると、工場労働に出たりしています。石牟礼道子自身が代用教員として働きに出ていました。つまり、外に出て働く近代社会というものを、皆で歓迎したわけです。

例えば、天草では娘が身を売らなければ家族が生活できないなどということが、現実にあった。けれども勤め先があれば、そんなことをしなくてもすむ。それから、例えば福島などがそうでしたけれども、東北の場合には企業城下町になれば出稼ぎに行かなくてすむんですね。それはそれである種の解決になるわけです。その代わりに代償がある。つまり極めてきつい、厳しい家族共同体というものができあがっていく。

明治 5 年に壬申戸籍というものができて、日本の近代戸籍制度ができるのですが、これが家父長制なのです。家父長というものを決めて、そこに強い権限を与えて、家族を支配する形をつくる。これが近代の家族制度です。このときにはもう侍がいない。武士階級がいないので、国民全員が苗字をもって、全員が武家のような家族制度の中に入ったということになります。庶民は家族制度というものについての違和感を、ずっと持ち続けるんですね。

では、人間の絆というものをどういうふうに考えていたか。これは一つの事例です。山本亦由さんという方について、『苦海浄土』が書いています。

山本亦由（互助会会長・訴訟派と一任派が分裂した時、その間にいた）という人が荷なったものは何であったか。……わが娘も、発病しているもんですからと語った時、声をおとし、目を伏せて、いかにも言葉少なであった。会社幹部の誠意、国の誠意を信じ、同じ郷党の園田大臣の誠意を感謝するというとき、この人は、自分と同じ厚情を、あるいはそれ以上の篤い心を当然相手も持っていると思い込んで疑わなかった。……山本亦由氏は一人で、すべてを引きうけていたのだった。（『苦海浄土』第二部・第五章「人間の絆」）

園田大臣という人は熊本から出ている。つまり郷里から出ている大臣ですね。その地元の大臣や、チッソの幹部の誠意、国の誠意、全て「偉か人」なのですが、首相も含めてこういう政治の世界での偉い人たちというのは自分よりも篤い心をもっているはずだ、と。篤い心というのは、他人を思いやる心ということです。しかしそうではないということが分かってくる。最近はますます、偉い人たちの篤い心など、遠い過去の産物です。

ここではさらに道子は「この沿岸の人びとの心の中にある人間の絆」の重要性を述べ、「人間の権利」という言葉は、それとは同列に並びえない、としています。「それはどんなに軀をよじっても、そこから自分を切りとることのできない大地の絆、大地化した人間のうちなる絆をいうのではないのか」と。人権とか人間の権利という言葉で主張しようとしても、無理です、と言っているのです。「大地の絆、大地化した人間のうちなる絆」という言葉が、失われたものの重大さを告げています。1970年代前後の運動について石牟礼道子は、こう書いています。

一人の人間に原罪があるとすれば、運動などというものは、なんと抱ききれぬ程の劫罪を生んでゆくことか。人の心の珠玉のようなものを、みすみす踏みくたかすにはいないという意味で。そのことに打たれ続けることなしに、事柄の進行の中に身を置くことなど、できなかった。（『苦海浄土』第二部・第五章「人間の絆」）

「運動」とは、チッソへの反対運動です。ここには新左翼系もいろいろな左翼系もどんどん合流して、まさに社会運動になったわけです。ところが、石牟礼道子は社会運動について「劫罪だ」と言っているんです。いろいろなものを壊した。「動き出している運動体に対して、私一人の気持を言えば、集団というものになじまないものをひそかに持っていた」と書き、兵隊ことば、組合ことば、活動家のセクト用語を極めて具体的に書いています。兵隊から戻ると、元々その土地にいたときに話している言葉とは全く違う言葉をしゃべるようになる。兵隊ことばで人と関わるようになる。組合活動が始まると、組合ことばが口から出てきて、組合用語というのを並べながら人を説得するようになる。活動家が入ってくると、活動家がセクト用語を使いながら話すようになる。そういうのが「弱者の上に特権と持って立つ者の、人間的な鈍感さ」だ、と。

私も含め、社会運動に関わった方たちは、多かれ少なかれ体験していると思います。自

分の心で感じていることではなく、上からやってきた言葉や、外から仕入れた言葉を相手に対してそのまま使う。正しいものとして押し付ける。教条主義です。うんざりします。そういうようなことを、ずいぶん石牟礼さんは経験したわけですね。

村では魂がないと言うとみんなで心配する伝統があつて、むしろそういうことが消えていくのに対応して「人権」という言葉が出てきましたから。それはそれで意味をもつ言葉ではありますが、それ以前の共同体に生きていた言葉に比べれば、まだ歴史が浅いというか、間に合わせにはよいけれど、大ざっぱで魂に届かない。「人権」では、どうも出生の奥の世界が見えてきません。草木にも魂があるというて、お供養なさる、魚の供養とか、キツネの供養、ネコの供養をなさるというのは、ペットを可愛がるというのとは、全然違うわけですよ。(全集第十六巻所収「対談・未完の世紀」)

私たちが日常に使っている言葉の奥に何がありますか？ という問いを、常に投げかけています。市民運動も同様です。

公害を告発する市民運動、などといういい方の中に、たとえば水俣病事件を入れてみるとその質感がまことにうすくて、名づけようもない一箇の存在者としての感性からは、非常に遠い。それは表層の現象や、状況さえあらわしえず、分類用語のひとつとしていたしかたないことではあっても、衝迫力を持ちえまい。まして、存在の河床に沈む魂たちにはとどかない。けれども、今のところ他の表現も考えつかないままに、運動らしきものの起こってくる時に立ちあい、そのような、魂たちのいるところになんとかいざり寄るべく、かかわりうるかぎりの人間関係の核の中に、わたくしはしどろもどろの秘かな志を織りこみ埋めこみ、護摩を焚くかわりに、ことばを焚いてきた。ことばが立ち昇らなくなると、自分を焚いた。

闘う共同体

私の書いた『公海・浄土・日本』の表紙の下半分の写真は原城の跡です。石牟礼道子にとっての「闘う共同体」は市民運動ではないです。人権の運動でもない。闘う「共同体」なんですね。それを『春の城』という作品の中に込めました。1971年にチッソの東京本

社に籠城したときに、『春の城』の構想を得た。



「当時、「団結」とか「連帯」、「自立」という元気のいい言葉が流行っておりまして。わたしは何か足らんなあ、なにか情愛において足らんなあと思っておりまして、それで、この人たちと「道行き」を共にするんだと思いきかせましたのです。道行きといいますと、人と人が、どのくらい絆を深めることができるか、見も知らなかった人たちとだんだん相知るようになって、煩惱がわいて来てはじめてできることです。」

「心の隅々まで、あるいは肉体の隅々まであたため合うような、死んだ先までも忘れ難い絆というものがないと、あんな、北風がびゅうびゅう吹く東京のど真ん中で座られたものではありません。」

（全集第十六巻所収「対談・石牟礼道子文学の世界」）

東京のど真ん中というのは、チッソ本社の籠城の時のことなのですが、籠城といって

もビルの中にずっといるわけではなく、本社の外に座り込みをしていたんですね。それがお正月の前後で、真冬の寒い日です。そういう日に座り込みをするんですが、それを「団結」とか「連帯」と言っている人たちもいるのだけれど、彼女の中ではそれは何だったのかというと「道行き」でした、と。つまり運命を共にする、先ほどの「死民」です。死を共にする人たちとの道行きだった。そうでなかったら、とてもやっていられなかったということを行っています。ここで、世阿弥の『風姿花伝』を読みながら、島原の乱のことを思い出し、『春の城』という作品を書くことになりました。

「私、その場にて不意に三百五十年前、キリシタンの殉教者たちが立てこもった島原。原城の中の情景が浮かび上がったんです」と。そしてチッソ本社の籠城も修羅場なのだけれど、「人間が試される聖域に変わっていく」というのです。それで『春の城』の中では「もう一つのこの世」という構想を持ちながら、原（はる）の城の戦いを書いていきます。ご存じのように、1637年から38年にかけて3万7000人が一挙に亡くなった。せん滅された百姓一揆です。キリシタンの戦いと言われますが、実際には島原藩の松倉家や唐津藩の寺沢家がいろいろな不正を行って、非常に重い年貢を負わせ、拷問や処刑を行っていたのです。それに対して一揆を起こしたのです。

農民一揆、百姓一揆というのは江戸時代の10年ぐらい前から非常に盛んに行われるようになって、明治初期までで数えると、だいたいひと月に1回は日本のどこかで一揆が起きていました。それほど盛んだった。今の、抵抗しないとされている私たち日本人とはちょっと考えられないくらいに、必ずどこかで何か抵抗運動が起こっていたと言っていると思います。

一揆というのはただ理念的なものではなくて、極めて具体的なもので、このことをこう変えてくれ、という具体的な目標・要求があって、その要求を書いて傘連判状という輪形のサインをするんですね。誰でもいいから無責任に、名も知れぬように参加するということはありません。必ず参加者はサインをします。責任を取ります。サインをするんだけど、首謀者が分からないように、サインを輪形にします。そうすると、どこから始まっているか分からないから首謀者が分からない。その真ん中に要求項目を書いたり、それとは別に要求書をつくったりするんですね。そういう形ができていく。この島原・天草一揆が、その形が形成されていくごく初期のころです。

島原藩と唐津藩、天草などに対して、彼らは単に要求をしているだけです。それなのに幕府が他の藩を動員して20万人ぐらい兵を送り込むんですね。これは単なる百姓一揆だ

と、幕府の側は思わなかったということです。幕府はオランダ東インド会社に話をつけて船を用意させていたようです。ポルトガル船が原城側にあったという話もありますが、それはなかったようですが、本当にあったとすると、オランダとポルトガルの代理戦争になった可能性がある。つまりプロテスタントとカトリックの戦争になる可能性があったということです。しかしこの最大の百姓一揆が起こったからといって、一揆がなくならなかったことが大事なことです。むしろ一揆の方法がこれで確立されたんです。それでずっと続けていくことになります。

『春の城』の籠城ですが、「アオサ」が採れたとか「嫁が笠」という一枚貝が採れたとか、何か海から採ってきたり、山から採ってきたりして食べ物の交換を行い、食べ物をみんなと一緒につくる。まさに共同体です。共同体とはこういうものかという一つの様子、モデルというのでしょうか。それを『春の城』では書いています。籠城している人たちの中に初めて生まれてくる、「役割のない共同体」です。もう死を目の前にした人たちの中で発生してきた、生まれ出てきた共同体の姿です。石牟礼道子にとっての真の「闘う共同体」がここで描かれたのです。

「自分が虫どもに似て来たと思うがのう」仁助がそんなことを言い出したのに、豆の皮をむいていたおうめが応じた。「じつはあたいも、左様に思いやす。前世は、虫か魚じゃったろうと思ひやす」「そこじゃて。虫であつた頃にはしかし、御明りを拝みよつたかのう」「虫どもは御明りが好きでござりやす。……百姓は虫けらとおなじじやと言われて来やしたが、地面の上下にやあ、虫もいろいろおって、可愛ゆうござりやす。信心深か虫もおひやすぞ、きつと」「うむ。お前の方がわしらより、泥まみれで働いたゆえ、地の中におる者のことはよう知つとろう」「何もかも知つとるわけじゃござせんが、あれたちが昼と夜の区別を知つとるのが感心で」
(『春の城』)

「自分が虫どもに似て来たと思うがのう」という会話です。虫でも魚でもいいというふうに思いながら、会話をしている。こういうシーンや、踊ったり歌ったり、食べたり飲んだりというシーン。いろいろな情景が描かれます。つまり、籠城といってもそこには生活がある。人間としての生活がある。これはチッソ本社の籠城でも同じだったということです。

そして、その共同体には必ず「もだえ神」がいる。誰かが窮地に陥ったときにたまらない気持ちになって、とにかく駆けつけて加勢したいと思う。力になれないかもしれないけれども、助けになりたいと、悶える。悶えるのは、助けられないから悶えるのです。その「もだえ神」が共同体には大事です。『春の城』には天草四郎が登場します。差別と貧困の中にいる人たちに寄り添っている少年です。そういう人を、もだえ神として設定しています。まさにチッソ東京本社籠城のときは、石牟礼道子がもだえ神としての役割を果たしていたんだろうと思います。

水俣学と谷中学

水俣学というのがもう既に成立していて、いろいろな観点から行われています。その水俣学のテーマの可能性がどういうものになり得るのか、整理してみました。

第一は、近代とは何かです。戦後の高度経済成長によって私たちは何を失ったのかということは、水俣学の大事なテーマになると思います。第二は、「もだえ神」という言葉によって表現されていた共感の力とは、一体何なのか。第三は、「たましい」と表現されていた人間の徳義とか、山川草木と人を同じ価値に思う価値観とはどういうものであり、どう失われてしまったのか。第四は「闘う共同体」です。本来の共同体とその闘いとはどういうものであるか。第五は女性の歴史。これに石牟礼道子は取り組んでいます。高群逸枝の『女性の歴史』を読むことによって石牟礼道子は救われていくのです。女性がどのように古代から生きてきたかということを客観的に知ることによって、自分がなぜ今ここにいるのかということが分かってくるわけですね。ですから、女性史というのはそういう意味で単なる歴史というよりも、女性の一人一人がなぜ自分は今ここにこのように生きているのかということを、歴史の中で考えるという意味で非常に重要で、これが地域の歴史とも関わってきます。第六に、共同体のあり方の歴史です。第七に食べ物の歴史。そして第八に、「もう一つのこの世」、つまりさまざまな宗教と関連する、一種の精神の歴史です。これらのテーマが、石牟礼道子の文章の中から抽出できるのです。

水俣学の範囲とは一体どのぐらいなのかと考えたときに、谷中学を思い浮かべます。「真の文明ハ山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし」と、田中正造は1912年に書きました。ここから考えると、「真の文明」を求める、あらゆる環境学が範囲に入るだろうと思います。

谷中学が残したことは、鉍毒の公害という課題だけではなく、治水上の問題、憲法の

問題、人道の問題、経済の問題、衛生の問題、生命の問題、そして「谷中の貧乏人」を追いつ出すという「人権の問題」でもありました。つまり差別の問題、格差の問題でした。

「感心なのハ谷中人民の忍耐ニて候。我々の考の上ニてありし。……研究研究。精々研究いたし申すべく、真相未だ相分りかね候点これあり候」と言って、田中正造は谷中学をやりながら何を考えたかという、地元の人がすごい、と言ったんですね。この地元の人の持っている忍耐力とか精神力を自分は理解できない。これこそが研究の対象だと言ったのです。二人の地元の人物の事例を挙げながら、「及ばざるもの必しも愚にあらず。智者必しも知らざる」と。要するに知識をもっているということと関係がなく、どんな思いをしても「水の中に安座して怒濤をさけるまで殆ど平気、……この人々の自覚ハ神ニも近き精神」だったと。田中正造はこういうところに辿り着きます。そこから谷中学ということを考えようとしたんですね。

同じようなことを実は石牟礼道子も言っています。

水俣の患者さんたちは、全存在を奪われ、海も空も、言語を奪われたにもかかわらず、相手を殺すことを考えつかなかった。決定的な治療法もなく、日々苦しみ続けて……。生まれたときの姿のままの胎児性患者さんもいる。亡くなった方を解剖すると小脳などはハチの巣状態になっている。にもかかわらず「ひとさまに二度とこういうことがないように」と、人類の受難を引き受けた気でおられる。患者さんにお目にかかるたびに感動しています。雄々しく、気高く目の前にいらっしゃるのを書き残さなければ、と思ひまして。この能がきっかけになれば、と思っています。(新作能『不知火』とミナマタ)

これは『不知火』という能をつくったときの石牟礼道子の言葉です。なぜ能にしたのか。事件そのものというより、この患者さんたちの存在のすごさを伝えたい、と思った。田中正造と同じもの、谷中学と同じものを、石牟礼道子はそこに感じとっていました。

地域の問題というのは政策だけではなくて、そこに生きている人たちは一体何を見て、何を思い、何を食べて、どういう共同体をつくってきたのか、何を失ってきたのかということなんですね。本当はそれを私たちは知らなければならない。それは再構成できるのか。再びつくることはできるのかという、それは無理かもしれません。けれども、何がそこにかつて存在していたのか、ということを知ることは、地域を知る上で非常に重要なこと

だろうと思います。

さまざまな地域

私が実際に合宿などで、例えば佐渡に行ったときに感じたことは、一つはどんな地域にもそれぞれの全く違う特徴がある、ということでした。佐渡の場合には、東なのに言葉が関西系です。それは貴族たちが流されたところなので、京都の貴族文化が入っているからです。それから江戸時代は天領として大変栄えたので、武士文化も入っている。北前船の寄港地なので、商人の文化も入っている、という混合文化なのです。他にはあまりそういう場所はありません。



この方は、文楽の人形遣いとして大阪や全国で活躍をしていたのですが、辞めて佐渡にこもりました。西橋健（八郎兵衛）さんと言い、代表を務める「猿八座」は 2021 年のサントリー地域文化賞を獲得しました。なぜ佐渡に行ったかという、江戸や大坂で消え去った文弥節とその人形が佐渡にあるんです。江戸や大坂の芸能は商業的な目的で行われて

いましたから、人気がなくなると廃れます。廃れた芸能は消えるのかというと消えません。どこか他のところに移動する。そうすると、それも面白いね、という人が継いでいくのです。それが江戸時代からずっとつながっているのです。それに気がついた文楽の人形遣いが、いや、自分は文楽よりこっちの方がいいと言って、佐渡に居着いてしまいました。漁師をしたり、人形づくりをしながら生きています。

ゼミ合宿では、その地域にしかない特質を、学生たちに知ってもらう方法を実践してきました。その特質は多くの場合、江戸時代から続く要素を持っています。佐渡の場合は、佐渡にしかない特徴的な文化や祭り、芸能、ものづくりなどを実践しておられる方々に案内していただきました。そうすると、学生たちは自分の生まれ育った場所はどういうところなのだろうか、と考え始めます。

最後に、秋田の事例を一つだけお話しします。これは白神山地です。



白神山地はゼミで何度も行っています。地域には必ず特徴がある、というのが学ぶべきことの一つです。それから、地域は必ず問題を抱えているというのが、もう一つの学ぶべきことです。どんな問題を抱えているのか。白神山地は青森と秋田と両方にまたがっています。1986年、87年辺りですが、まだまだ白神山地の重要性というのは誰にも分かっておらず、ここに道路を通そう、林道を通そうという案が湧き上がりました。たくさん木を切って林道を通すということは、それを利益につなげようという話です。

それに対して非常に激しい反対運動が起こりました。青森県側と秋田県側で反対運動が

起こって、まず秋田県側の工事が 1986 年 11 月にストップするのです。それで青森県側の運動に譲り渡されて、最終的にストップした。その結果、世界遺産になった。ブナの原生林は守られました。

この林道工事の中止を求める運動は、非常に大きな意味をもったのですが、実はこのときに関わった方に秋田に案内していただくことになりました。学生たちを連れて毎年行きました。もう亡くなりましたが、小説家でエッセイストでした。『千年の夜』『涙ぐむ目で踊る』『菅江真澄みちのく漂流』『獅子ヶ森に降る雨』など、秋田にまつわる歴史を書いていた方です。

地元はいろいろな人間関係があります。家族関係、親族関係、血縁関係。この反対運動のときに、彼の奥さんが自分の子どもを連れて自殺なさったんです。入水自殺なさった。そのときに秋田で出版社をやっていたのですけれども、この出版社を畳んでしまいました。その後は細々と執筆だけで、亡くなるまでずっと秋田から一步も出ないで、生きていらしたんですね。それで私たちが行くと、丁寧に案内してくださる。縄文遺跡の発掘現場だとかそういうところにも連れて行ってくださるのです。

それぞれの地域には何かの曲がり角になる事件とか時期というのがあって、そこで力を発揮する人がいますが、そういう人たちが必ずしも幸福なわけではない。いろいろな目に遭ったり、いろいろな思いをしたりする。事件に巻き込まれる。人生が変わってしまう。そういう人たちに、私は巡り会ってきました。

地域にたくさん人が行けば発展していいよねとか、企業が行けばみんな勤め人になれていいよねという話ではなく、地域が変わっていく曲がり角にいた人は何を体験して、どういう思いでその後生きてきたのか、そこに注目する必要があります。人間に注目しなければ、地域が今のような近代化の方向だけではない別のあり方を求めて、もう一度再生する、あるいはクリエイティブなものになっていくという端緒は、やはりつかめないのではないかなと思うんです。そういうことを、さまざまところで私は考えるようになりました。

駆け足でしたが、ぜひ石牟礼道子をこのきっかけでお読みになったり、あるいは朗読でお聞きになったりしながら、また地域のことを絆という問題だとか、共同体の問題だとかを考えるきっかけにいただけたらと思います。